

研究ノート

石橋湛山にみる近代仏教の特質

— 在家仏教と日蓮主義 —

戸田 教 敞

一、はじめに

石橋湛山（一八八四—一九七三、以下「湛山」と略記）については、湛山存命中から半世紀以上にわたって様々な角度から研究が積み重ねられてきた。^{*1} その結果、言論人、経済論者、政治家、そして思想家として、湛山の思想や行動が明らかとなってきた。

さて、これまでの研究史のなかで、湛山が日蓮聖人の影響を強く受けたであろうことは多くの研究者によって指摘されるところであり、ほとんど湛山研究における共通認識といつてよい。実際、湛山の日蓮聖人受容や湛山と日蓮宗の関係についての研究は少しずつ蓄積されてきている。^{*2} 湛山には日蓮門下意識を前面にあらわした発言も多くあり、湛山の思想や行動をいかにとらえるべきかという点は、近代日蓮教団史としても見逃せない問題である。

そのような問題を検討していくにあたって、湛山が生きた当時の日蓮教団の動向に注目したいと考えている。本稿では特に「在家仏教」と「日蓮主義」という、日蓮教団だけでなく近代仏教全体にとって重要な二つの特質に着目し、湛山の言論を読み解いていきたい。

二、湛山と日蓮宗のつながり

まずは、略年譜を用いて湛山の略歴を確認しておきたい。^{*3}

明治一七年（一八八四） 〇歳

父杉田日布、母石橋きんの長男として生まれる。

二七年（一八九四） 一〇歳

望月日謙に預けられる。鏡中条村尋常高等小学校に転校。

二八年（一八九五） 一一歳

山梨県尋常中学校（現在の甲府第一高校）入学。得度。

三四年（一九〇一） 一七歳

同校校長にキリスト教信仰者・大島正健が着任。

三五年（一九〇二） 一八歳

湛山と改名。同校卒業。第一高等学校（東京大学教養学部）受験に失敗。

日謙が校

長を務める山梨普通学校の助教となる。

三六年（一九〇三） 一九歳

早稲田大学高等予科に入学。一年ほど茗谷学園に寄宿。

三八年（一九〇五） 二一歳

二年に進級。哲学者・田中王堂の倫理学史講義を受講。

四〇年（一九〇七） 二三歳

文学部卒業。特待研究生として宗教学研究科へ進む。

四一年（一九〇八） 二四歳

宗教学研究科修了。東京毎日新聞社入社。

四二年（一九〇九） 二五歳

同社退社。大講師に叙せらる。

麻布歩兵第三連隊に志願兵として入営。

四四年（一九一〇） 二七歳

東洋経済新報社に入社。

大正 元年（一九一〇） 二八歳

岩井うめと結婚。

一三年（一九二四） 四〇歳

東洋経済新報主幹に就任。

昭和 六年（一九三二） 四七歳 経済倶楽部創立し常任委員に就任。

九年（一九三四） 五〇歳 英文雑誌『オリエンタル・エコノミスト』創刊、主幹に。

一六年（一九四二） 五七歳 東洋経済新報社が社長制新設、代表取締役社長に就任。

二一年（一九四六） 六二歳 戦後初の総選挙に自由党から立候補し、落選。

第一次吉田内閣の大蔵大臣に就任。

二二年（一九四七） 六三歳 静岡県第二区より立候補し当選し衆会議員となる。

G H Qにより公職追放を受ける。自由思想協会設立。

二六年（一九五一） 六七歳 公職追放解除。

二七年（一九五二） 六八歳 第十六代立正大学学長就任。

二九年（一九五四） 七〇歳 鳩山内閣の通産大臣に就任。

三一年（一九五六） 七二歳 第五十五代内閣総理大臣に就任。

三二年（一九五七） 七三歳 権大僧正に叙せらる。内閣総理大臣を辞任。

三四年（一九五九） 七五歳 中国訪問。石橋・周共同声明を發表。

三六年（一九六一） 七七歳 日中米ソ平和同盟案を發表。

三九年（一九六四） 八〇歳 ソ連訪問。

四三年（一九六八） 八四歳 立正大学学長を辞任。

四五年（一九七〇） 八六歳 東洋経済新報社より『石橋湛山全集』刊行開始。

四七年（一九七二） 八八歳 『石橋湛山全集』全十五卷完結。^{*4}

四八年（一九七三） 四月、死去。享年八十八歳。

湛山の生涯については、『石橋湛山全集』の年譜や、評伝等に詳しく記されているので、ここでは日蓮宗に関連する事項（年譜中 で示した部分）についてのみ触れる。

明治十七年九月二十七日、身延出身で、後に久遠寺第八十一代法主となる杉田日布（湛誓）の長男として生まれる（幼名・省三）。当時、日布は二本榎承教寺にあった日蓮宗大教院の助教を務めており、母・きんの生家である石橋家は承教寺の有力な檀家であった。その後、山梨県青柳昌福寺、さらに静岡県池田本覚寺の住職となる。本覚寺に移る際、十歳となった湛山は山梨県長遠寺住職・望月日謙に預けられ、本格的な僧道生活に入る。翌年、日謙を師として得度。明治三十五年には湛山と改名。同年、山梨県立第一中学校を卒業した湛山は、第一高等学校（現・東京大学教養学部）を受験するも不合格となり、十月からは日謙が校長を務める山梨普通学校の助教となる。山梨普通学校は日布らを発起人として開設された、宗門子弟教育を目的とする私立学校である。明治三十六年九月、湛山は早稲田大学高等予科に入学するが、入学後一年ほどは東京都小石川（現・文京区）の茗谷学園に寄宿し、後に宗門で活躍する僧侶たちと交流を深めた。^{*}

明治四十年、早稲田大学を卒業した湛山は同校の宗教研究科に進学。修了後は東京毎日新聞社に入社しジャーナリストとしての第一歩を歩み出すも、同社の内紛を原因として翌明治四十二年に退社、十二月からは志願兵として第一師団歩兵第三連隊（麻布）に入営する。なお、入営の直前の十月、日蓮宗から大講師の昇叙を受けていることが史料によって確認できる。^{*6}

これ以降、しばらくは湛山と日蓮宗の間に表立った関係はほとんど見られない。勿論、日布や日謙、また兄弟弟子にあたる藤井日静（教仁）や望月日雄（一雄）等、幼少からつきあいのある人物との交流は随所に見られるが、あくまで個人的な範囲にとどまる。次に湛山と日蓮宗が公な形で繋がるのは、昭和二十七年の立正大学学長就任である。

湛山は昭和二十七年から昭和四十三年まで、十六年間にわたって学長を務めた。ここでは詳細は割愛するが、当時経

嘗が危機的状况にあつた立正大学を立て直した業績は、宗門にとつてもあまりに大きい。学長就任期間中の昭和三十一年、湛山は第五五代内閣総理大臣に就任する。史上初めてとなる日蓮宗の僧籍を持った人物の首相就任に宗門も大きな期待と祝意を寄せ、明けて昭和三十二年、当時の日蓮宗管長・増田日遠は湛山に権大僧正を授与した。昭和四十八年、湛山は八十八歳でこの世を去るが、「謙徳院殿慈光湛山日省大居士」という法号が授与された。

三、在家仏教と日蓮主義 — 田中智学を例として —

次に、湛山が生きた時代の日蓮教団について、特に在家仏教と日蓮主義という二点に着目してみていきたい。具体的には、田中智学（一八六〇—一九三九）の著作を通じ、それぞれどういった思想かを確認していく。先にも触れたとおり、在家仏教と日蓮主義は近代仏教に現れた特質であるが、日蓮教団史の中でこれらの点について論じるとき、智学は避けて通ることの出来ない人物であることは間違いない。

智学の父は元々在家講の篤信者であり、父の死後、智学は縁あつて日蓮宗の僧侶となる。しかし、当時の撰受的な宗風に疑問を抱き十九歳で還俗、以後は在家の立場からの独自の布教活動を行なっていく。智学は、出家者にたよらずとも在家信者が主体となつて仏教を信仰し弘めていく「在家仏教」を提唱し、明治十三年、横浜で「蓮華会」を結成、さらに東京に移り、明治十八年「立正安国会」（大正三年「国柱会」へと発展）を設立する。また智学は、日蓮聖人滅後の門流分立による日蓮教団の問題を指摘し、日蓮聖人の教えに直参すべきであると主張して「日蓮主義」を創唱した。

以下、智学の「在家仏教」と「日蓮主義」に関する記述を確認していく。

i. 田中智学と在家仏教

佛法は最後本當に信じたならば、實生活の中に教理及び信仰をとり込むやうにならなければいけないといふやうな意味のことを教訓して居った、坊さんになつてから始めて佛教の修行をするといふことではいけない、佛法を信ずるといふことは實際に行ふことである、佛法は寺院まかせ坊さんまかせと考へてゐては、宗門も振はないし國運も發展しない、専門的にかたづいてはいかん、即ち普遍的に佛教の信仰が勢ひとなるやうにならなければならぬといふことを唱へた、俳諧はすべし俳諧師とはなるべからず、味噌の味噌くさきは上味噌に非ずといふことを、明けても暮れても酒を呑みながら話して居ったので、敢て家庭の薫育といふわけではないが、それが何時となく子供の時代の私の耳に残った*。

これは『自伝』中、智学が父・玄竜の薫陶を語る部分である。在家仏教は近代になって突然に起こつたものではなく、それ以前にも「講」という在家者主体の信仰組織があり、在家仏教興隆の土壌となつた。講は、寺院側の布教活動に淵源を發しているものの、篤信の在家者によつて指導されることも多く、智学の父も「寿講」という在家講に属し、法華經と日蓮聖人信仰に対する熱烈な信仰を持っていた。寿講には「仏教は寺院僧侶だけが学べばよいものではなく、在家信者自身が積極的に行い、世間に広く活かすべきである」という信仰姿勢が見られ、そのような在家者主体の信仰姿勢を、智学は父から聞かされていたという。

また次の文章からは、智学が還俗を決意する際、在家仏教興隆への志が大きな要因となつたことが知られる。

それから亡父の始終言つてゐた信仰の一般化といふ、所謂在家仏教、これを以て立たなければ嘘だといふことが、非常に強く自分の心を打つたので、終に意を決し、先づ第一に智境院師に、自分の腹の中を話して、宗門のため自分は一時僧籍を脱して任意の行動を取りたいからといふことを請願した*¹⁰

智境院師とは、当時、名布教家として知られていた智学の師、一之江妙覚寺・智境院日進のことである。

さて、智学の在家仏教論は、『仏教夫婦論』と「仏教僧侶肉妻論」という二つの論著を通じて確認することが出来る。^{*11}そこでは、当時の仏教界への批判、末法の世における弘教の在り方などが論じられている。

次の文章は、『仏教夫婦論』第一章「総論」の一節である。

「傳來の教導方多く厭世の主義に傾きたりしと、中古以降葬祭を以て佛教家の常職と定めしとに由り、佛教は彌々世間の最要部分に疎遠し去れり。世人は單に佛教を目して方外の看を爲し、佛教家も亦自ら甘んじて世間外に在りて或は以て自ら高しとするに至る。是を以て愛教の主義は變じて厭世と化し死を説いて生を談せず、葬殯を事として婚嫁を誨へず。人間經歷の最要時節たる生涯を抛棄して、徒らに漠然の死後を談ずるを務めとなすに至りては、眞に世間國家を誤りたるの太甚^{はなだ}しきものと謂ふべし。^{*12}」

中古以来の日本仏教が厭世主義に傾き、所謂「葬式仏教」と化して、世間への教化を疎かにしてきたという批判がなされるが、このような批判意識が智学の在家仏教論の出発点となっている。仏教の教えとは死後を説くためではなく、生活に活かすための仏教であるという主張は、後にみる日蓮主義とも大いに関連してくる。

また、「仏教僧侶肉妻論」も、明治政府による公許「肉食妻帯蓄髪等可為勝手事」が発せられて以後、肉食妻帯が公然と行われるようになった仏教界に対する現状批判から始まる。しかし、この論文の目的は肉食妻帯批判そのものにはない。智学は、末法においては出家も在家もなく、みな在家の菩薩として戒よりも信を重視すべきである、ということを様々な角度から論証していくが、ここではその結論的部分のみを引用する。

今や外か小機を將護するの必要なし、何を以て外現是声聞の旧套を襲はん。又習小助大律儀相伝の必要なし、何を以てか声聞遺傳の劣風を学ばん。末法濁世時尚風好、復た古と同じからず。僧侶の一身已に出世間の者に非ず。時機制度の然らしむる所、退いて一戒を護らんよりは、進んで邪見を救ふべきの急務あり。之を云何ぞ区々習慣の為に大義を誤らんや。^{*13}

日本仏教は大乗仏教であり、僧侶は大乗の菩薩であるので、声聞の戒行に習う必要はない。また、釈尊在世のインド社会とは大きく異なり、戸籍への編入や課税・徴兵等の国家制度によって、僧侶といえども出家を保つことは出来なくなったが、大乗の菩薩である以上そもそも出家にこだわる必要もない。ましてや現代は末法無戒の世である。つまり、もはや僧侶の肉食妻帯に関する制戒は、単に「慣習」として行う以上の意味はないのである。ここにおいて、僧侶は在家の菩薩としての自覚を求められることとなる。

応に知るべし、今日に於ける佛教の僧侶は、身大乗の菩薩なることを。又応に知るべし、菩薩は比丘を必せず戒行は肉妻を必せざることを。又復た応に知るべし、末法今時吾国の僧侶は、早く已に其法籍と資格を在家の菩薩に編し去られたることを。又復た更らに応に知るべし、在家の菩薩家居して妻子を蓄ふ、一己の私欲に在らずして、護法護国の為なることを。^{*14}

これは、「仏教僧侶肉妻論」の結論であり、智学の在家仏教の根幹である。僧侶であってもその本質は在家の菩薩であり、形としての僧俗の違いに意味はない。このことは、後に執筆される『宗門之維新』には、「今の所謂僧侶は古の所謂優婆塞なり」^{*15}と表現されている。

ここまでの所で、仏教を世間に活かすべきであること、皆が在家の菩薩であつて本質的には僧俗の別はなく、菩薩としての自覚と主体性をもって信仰していくべきであること、などが智学の在家仏教論の要点としてあげられる。

ii. 田中智学と日蓮主義

戦後の研究史において、智学の日蓮主義＝国家主義と捉えられる場合が多かつた。^{*16}確かに、智学自身、

日蓮主義者の第一の世に對する務めとして、國體闡明といふことをやらなければならぬといふことを考へだした^{*17}と述べているとおり、智学の日蓮主義運動と国家・国体とは切り離すことはできない。しかし、そういった面だけ

を見ていては、日蓮主義の「根本的意義」を見落としてしまうように思われる。ここでは、智学の目指した日蓮主義とはどのようなものだったか、確認しておきたい。

次の文章は、日蓮主義宣揚と宗門改革のために著された『宗門之維新』の一節である。

歷代の先師、徳ありとも學ありとも、祖師には換へがたかるべし、況や先師そのもの、竄入といはんよりも、後學轉謬の失意誤用に由る者多々なるをや、若し純らに祖師に依らんといふを厭ふの先師ありとせば、これ既に宗門の先師にあらざる也、斯の如きものに對しては、宗家はその祭を絶て可也、畢竟、時代の推移と共に、近き情實に壓されて、漸々その本根に薄らぎ行きたる結果、遂に「法類」「先師」あるを知て、「祖師」「宗門」あるを忘るゝに至れるもの也、今の宗門は法類の宗門也、先師の宗門也、故に動もすれば、分裂の夢を描き、孤立の陋に陥らんとする也^{*18}

在家仏教論と同じく、ここでもやはり日蓮教団に対する現状批判が前提となっている。日蓮聖人滅後、その教えは脈々と受け継がれてきたが、「転謬の失意誤用」や、時代毎の「近き情實」に影響された結果、本来の意義からずれた「先師の教え」となってしまったという。確かに、六老僧以来、各門流ごとに教義解釈の違いもあり、それが門流同士の対立やさらなる分裂を生んできた歴史がある。その結果として、法類や先師の教えに依る宗門となり、宗祖の意に適っているとはいいがたい日蓮教団の現状を智学は批判する。

不吉なる「病的宗是」去れ、而して健全清雅なる「宗是」復せよ、後人の竄入に聽く勿れ、加水の乳を服する勿れ、爾ちの宗門を生みて、恒久爾ちの爲めに父たり君たり師たる、爾ちの祖師に聽け、祖師の命ずる儘に行へ、別の才覺を去れ、小情實を徹せよ、直ちに爾の祖師を乗て「宗是」とせよ^{*19}。

日蓮聖人滅後の歴史の中で培われた教えや伝統は、あくまで先師や門流の教えであり、決して日蓮聖人の教えを超えるものではない。「後人の竄入に聽く勿れ、加水の乳を服する勿れ」とは、そういった伝統にとらわれて本質が見

えなくなっている日蓮教団に対する批判であり、「祖師を秉て「宗是」とせよ」とは、日蓮聖人に直参すべきだという智学の基本姿勢を述べている。そしてそれは、実際の活動の中では、「宗門革命 祖道復古」というスローガンとして現れる。

また、そういった宗祖に尋ねる姿勢は、教団内部のみならず世間一般にも向けられるべきであるという。

政事であれ、経済であれ、社会でも人事でも、凡そ人間世界のすべての事に正しい動力となつて、實際の益を興す（中略）廣汎を意味し實際的指導原理なることを示すために、特に『日蓮主義』と稱したほど故、決してくお寺の中や佛壇の中へ封じこめて置くべきでなく、世間の萬般、人生のすべてに亘つて、何事にも光明となり力となり命となつて世を率ゐて行く所の活指南であることを承知して掛るべきである。^{*20}

このように、日蓮主義とは観念的なものではなく、「世間の萬般」「人生のすべてに亘つて」「活指南」となる、「實際的指導原理」であることが述べられる。これは、先に確認した在家仏教論とも重なるところである。

日蓮主義は「世間の萬般」に対する「活指南」である以上、国家主義とも、また他の様々な思想とも融合しやすいという性質がある。しかし、その根本的意義を考えるならば、ここで確認したような、「日蓮聖人への直参（＝祖道復古）」と「教えを世間一般に活かす姿勢（＝實際的指導原理）」に集約されるのではないだろうか。これは、近現代の日蓮主義者たちを見ていく上で、重要な点であると思われる。

さて、智学の思想と活動は、当時の日蓮教団の僧侶たちにも少なからぬ影響を与えた。湛山の思想形成と日蓮宗の関連を考えると、そういった当時の日蓮教団の状況にも留意すべきであろう。

四、湛山における日蓮主義と在家仏教

これまでの研究では、湛山と智学のような日蓮主義者とは対比的に論じられることが多かった。^{*21}それは湛山自身、

当時の国家主義に傾いていた日蓮主義者達に向けた批判とみられる言説を遺していることもあり、当然といえる。しかし、それはあくまで「偏狭な」日蓮主義者への批判であり、日蓮主義そのものへの批判ではない。

先ほど確認した日蓮主義の根本的意義に従って見ると、湛山にも多分に日蓮主義的な面が確認できる。ここでは湛山の言論から、日蓮主義的、さらには在家仏教的意識がみられる箇所を確認していきたい。

i. 湛山にみる日蓮主義

今年、日蓮宗の開祖日蓮上人が生れて七百年に当たると云う。日蓮宗の寺院は、各地で盛んな法要を営み、之を記念するらしい。今日の僧侶が、概言して、何等救世の熱情もなく、其見識も欠ける職業的宗教家に過ぎざるを知る者にとって、彼等の御祭騒ぎは、些の感激をも齎らさない。^{*23}

これは、日蓮聖人降誕七百年に際し各地で行われた記念事業に対する湛山の評論である。この中で、今日の僧侶達はそのほとんどが「何等救世の情熱もなくその見識も欠ける職業的宗教家」であると、日蓮教団に対する厳しい言葉を向ける。また次のような評論もある。

記者は、宗教家の子弟にして中等学校乃至高等学府に学ぶ者の多くに接して其の無気力無節操なるに常に呆れる。彼等は、宗教を以て商売と心得え信徒を顧客と感じ、家産相続の一つの資格として学業を修めるにすぎぬ。現在宗教家の学問は概ね此の類である。^{*24}

湛山は幼少期以来、日蓮宗の空気の中で育ち、茗谷学園在籍時には宗門子弟とも直接の交流を持った。そんな湛山の目に、多くの宗門子弟達は「無気力無節操」と映ったようである。

このように湛山には、当時の仏教界、そして日蓮宗に向けられた批判的言説が度々みられる。これは先に確認した智学の日蓮主義と共通するが、やはり湛山の場合も、宗門への現状批判が日蓮聖人の教えに回帰する姿勢とつながっ

ている。例えば、先にあげた日蓮聖人降誕七百年に関する評論には、次のように記される。

もし、日蓮上人にして、今日この世界にあられたならば、何とせられたであろう。開宗七百年を記念するものは、まず、ここに深く思いをいたし上人立宗の精神の宣揚に努むべきではあるまいか。^{*25}

日蓮聖人が現代日本に存在したならば何とせられたであろうか。こういった考え方は、言い換えれば日蓮聖人に直参するということであり、それは次のようにも表現される。

宗門は今や、その全体が実に重大な危機に立っているとと思われるのである。

これを救う道は、愚案によれば「宗祖に帰る」外にない。宗祖に帰るとは、言をかえれば宗祖を現代に生かしまいらせることである。もし宗祖が今日在世ならば、いかにせられたか。これこそ、われわれの考えなければならぬ緊急事である。それはただ宗門をよみがえらせるだけの方法ではない。まさに日本を、そうして世界を救うみちである。^{*26}

これは立正大学学長時代、学生に向けた言葉である。まず宗門が危機的状況にあるという現状認識があり、それを救うには宗祖の教えに帰るしかないと述べる。「宗祖に帰る」とは、智学の言葉で言えば「祖道復古」であり、現代の問題に対して日蓮聖人を規範として考える日蓮主義の精神そのものである。湛山は智学のように、日蓮聖人の教学にまで踏み込んで論じることはないが、「宗祖に帰る」「宗祖を現代に生かしまいらせる」といった姿勢は十分に日蓮主義的であり、智学と共通している。

また、湛山自身の行動や言論についても日蓮聖人を規範として述べる点にも湛山の日蓮主義をみることができる。一例として、「意志の堅い日蓮上人」と題された評論の一節を見てみよう。

「日本国の位をゆづらん。法華経をすてて、観経等について後生を期せよ、父母の顔を勿ん、念仏申さずばなごの種々の大難出来ずとも、智者に我義破られずば用ひじとなり」云々。ここに注意すべきは、「智者に我が

義破られずば」と記されたことである。

大聖人の法華経の信仰は、一時の思いつきや、他人の説の受け売りではない。その多年にわたる周密の研究と、鍛えに鍛えた思索の結果到達した結論であった。されば、宗祖はたとえ如何なる智者が現われるとも、断じてわが説を破りうるもののあるはずなはいとの確信をいだかれた。ここに私は、世人から見ても狂信とさえ感ぜられる宗祖の強き主張が現われたものと思う。私が心臓の強い男といわれたのもまことに倫を失した申し条だが、いささか、これに類するのである。私は、自ら研究し、正しいと信ずる主張を述べるのに遠慮はしなかった。それは、いわゆる心臓のゆえではない。理論の背景があったからである。日蓮門下の末席をけがす一人として今後も私は、これでゆこうと思う。^{*27}

湛山の信念の裏には、必ず徹底した研究があった。経済論でも外交論でも、必ず根拠を示して主張をした。ここでは、そのような自身の姿勢と日蓮聖人の信仰態度を重ね合わせている。日蓮聖人の信仰は、決して閃きや他人の受け売りなどではなく、徹底した仏教研究の結果得られたものである。だからこそ不転の覚悟も持ち得たし、誰に対しても強い主張が可能だった。この点を湛山は非常に重視し、自身の研究姿勢に重ねた。

このように、湛山は日蓮聖人の信仰について、教義の具体的内容よりも、むしろ信仰姿勢そのものに学ぼうとしたように見受けられる。これは湛山の日蓮主義における一つの特徴であるといえよう。それは、立正大学長時代の次の言葉にもあらわれている。

立正精神という事は建学の精神といたしているのでありますから、その宗教的意義を十分發揮する事が大切であります。宗教的と申しても何も礼拝をしたりお題目を唱へる事ではない。根本的な考え方、正しい法を立てるといふ精神であります。^{*28}

湛山にとっては、「根本的な考え方、正しい法を立てるといふ精神」こそ、現代に生かしまいらせるべき日蓮聖人

の精神であった。

ii. 湛山にみる在家仏教

私は今でも有髪の僧のつもりであって、職業は別の世界に求めたとはいえ、宗教家たるの志は、いまだこれを捨てたことはない。

湛山が「有髪の僧」という意識を持ち続けたことは度々語られるところである。僧侶・宗教家としての自覚を持ちながら、世俗の職業に就いて仏教の教えを活かしてゆく。こういった湛山の意識は、還俗し在俗の立場から積極的な布教活動を行なった智学と近いものが感じられる。厳密に言えば、智学の在家仏教論では「在家の菩薩」が主体となつて世間一般に仏教を活かしていくのであり、世俗の職に就きながらも出家としての意識を保ち続ける「有髪の僧」とは、ずれがあるようにも思える。しかし、湛山の場合、単に仏教を世間に活かす主体として「有髪の僧」という言葉を用いているのであって、その本質は出家か在家かというような区別は特に意識されていない。世俗に身を置きつつも仏教を主体的に行うという点において、やはり智学の在家仏教と共通しているといつてよい。

また、次の文章はインタビューで経済学者の見地から仏教教団に対する感想を求められた際の湛山の答えであるが、ここにも、智学の在家仏教と重なる見解が見られる。

仏教それ自身には優れた内容をもつものと思いますが、教団としての仏教が今後復興するかどうかということは、一口に云えるものではないが、現在の組織の儘では、忌憚なく批評すれば将来性において望み薄だと言っほかない。教団仏教は全く現在社会と隔離して終っている。そして隔離したままで固定せんとしているのではないでしょう。もし一大変革の決意を為して、現在の制度を改めて総合統一されるような気運に向い、僧侶だけが教役に携るとすることも改められて、信者が教師になって自由に信仰運動でも出来るようにならねば活発にはならな

いでしよう。^{*30}

仏教教団が社会と隔離してしまっているという指摘は、智学の在家仏教論でもみられた。そして、今後仏教界が復興していくためには、僧侶だけでなく「信者が教師になって自由に信仰運動でも出来るように」「一大変革」が為されねばならないと述べる。そして僧侶だけでなく、在家の信者が主体的に信仰活動をすべきであるという考えは、在家仏教の基本ともいえる理念である。

湛山がこのような見地に立ち、また自身も「有髪の僧」という意識を持ちつつ世に出て活躍したことは、単に湛山個人が革新的人物であったからではない。近代における在家仏教の興隆が当時の日蓮宗、そして湛山にも影響していると思われるであろう。

五、おわりに

本稿では、在家仏教と日蓮主義に着目し、田中智学を具体例としてその内容を確認してきた。また、そのような視点から湛山の言論を検討し、その中に在家仏教、そして日蓮主義的意識が確認できた。湛山の思想形成の背景として当時の日蓮教団があり、そこには智学に代表されるような革新的気風があった。ちなみに、父・日布と師・日謙は智学と同世代の宗門人であり、両者の思想傾向として「はなはだ進歩的で、保守がぬめいと思われる点は、少しもなかった^{*31}」という点も、当時の宗門にあった革新的な空気を感ぜさせる。

さて、これまで対比的に論じられることの多かった湛山と日蓮主義者であるが、両者の共通性を知ること、これまでより一歩進んだ湛山理解が可能となるように思う。例えば、田村芳朗氏は近代の日蓮主義を「一、国家主義的な日蓮信奉」「二、国家超越的、宇宙実相の信仰」「三、日蓮系の新宗教運動」の三型に分類したが、湛山はこのどの型とも異なる日蓮主義のあり方を示しているのではないだろうか。また、湛山に日蓮主義や在家仏教という近代仏

教の特質が見られることから、今後は近代仏教史の視点からも研究されるべき人物であるといえる。

※本稿は平成二八年十二月十七日「第四回石橋湛山研究学会」における研究報告「石橋湛山と日蓮宗―日蓮主義と在家仏教の視点から」の内容を元に、論文化したものである。

*1 湛山研究史については、これまで多くの論著にまとめられているので、ここでは詳述しない。最近では「石橋湛山研究を振り返って(上・下)」(『自由思想』一四二―一四三号、石橋湛山記念財団、二〇一六)の中で、増田弘氏によってこれまでの湛山研究の回顧と今後の展望が述べてられている。

*2 たとえば、渡邊寶陽「石橋湛山の宗教観の一端と法縁の周辺」(『自由思想』三八号、一九八六)、同稿「石橋湛山の宗教観」(『フォーラム』一七、立正大学、一九八九)、同稿「父・日布上人を語る」を読んで 動乱を生きた改革者―湛山の進路を見守る日布・日謙―(『自由思想』一三二号、二〇一三)、同稿「石橋湛山―兵宮から」を読む(『自由思想』一四四号、二〇一七) 小野文瑠「昭和法華人列伝―戦火を越えて二十八人―」(国書刊行会、一九九三)、石村柳三「石橋湛山の宗教観とその思想形成」(『法華』八〇巻二二号、法華会、一九九四)、同著「石橋湛山―信念を背負った言説」(高文堂出版社、二〇〇四)、望月一靖「仏教に根ざしつつそれを超える思想―石橋湛山・通奏低音としての宗教的信念―(シリーズ「石橋湛山を語る」第一三回・一七)」(『自由思想』、二〇〇九)、望月詩史「石橋湛山の日蓮論」(『同志社法学』六一―三、同志社法学会、二〇〇九)、望月哲也「石橋湛山の立正安国」(『国際宗教研究所ニュースレター』六四、国際宗教研究所、二〇〇九)、浜島典彦「石橋湛山―真実、正義、和平の人」(『大法輪』八一巻一〇号「特集Ⅱ近現代著名人の信仰」、大法輪閣、二〇一四)、早川誠「現代から見る石橋湛山」(『現代宗教研究』四八号、現代宗教研究所、二〇一四)、同稿「石橋湛山―平和への願

いと行動―」（『現代宗教研究』五〇号「第四八回中央教化研究会議 基調講演」、二〇一六）、三原正資「三大誓願に生きる 石橋湛山の信仰」（『現代宗教研究』五〇号「第四八回中央教化研究会議 基調報告」）等があげられる。

- また、宗門大学である立正大学との関係については、渡邊寶陽「身を以て実行した、批判と自立の日蓮の精神―戦後困難の立正大学学長として精神的支柱に」（『自由思想』一一八、二〇一〇）、早川誠「第十六第学長 石橋湛山研究」（『立正大学の一四〇年』、立正大学学園、二〇一二）、同稿「石橋湛山と現実主義―立正大学の視点から―」（『自由思想』一二七号、二〇一二）、同稿「公職追放後の石橋湛山―教育者としての軌跡を中心に―（上）」（『立正大学史紀要』創刊号、立正大学史料編纂室、二〇一六）、齋藤昇「石橋湛山の教育理念と立正大学」（『自由思想』一四五、二〇一七）等がある。
- *3 本年譜を作成するにあたり、主に「石橋湛山年譜」（『石橋湛山全集』（以下『全集』と略記）十五卷、東洋経済新報社、一九七二）を参照した。

- *4 二〇一二年、東洋経済新報社より第十六卷（補卷）が刊行されている。

- *5 渡邊寶陽「石橋湛山の宗教観の一端と法縁の周辺（続）」参照。ちなみに、当時の『茗谷学園一覧』（一九二三）には学園の綱領や園規とともに学園出身者一覧が記されており、湛山の名も確認できる。

- *6 『日宗新報』一〇四八号（日宗新報社、明治四二年一月一日）の「僧階昇叙」欄。

- *7 学長就任の経緯や学長時代の業績については、脚注*2に挙げた論稿を参照。

- *8 近代仏教史における「在家仏教」と「日蓮主義」については、たとえば次のような指摘がなされている。

明治の仏教運動に現れた一つの特質は、在俗仏教者や還俗仏教者が在家の生活においても「仏の人」や在家菩薩になることができるということで、教化思想の成立をみたことである。（池田英俊『明治の仏教―その行動と思想』、評論社、八七頁）

智学と日生の日蓮主義は、近代において再解釈・再編集された日蓮仏教のあり方であり、近代社会における日蓮仏教の実践のひとつのパターンであったことがわかる。現実社会に対応すべき宗教のダイナミズムとすべきものが、「日蓮主義」という言葉によって表現されており、日蓮主義運動とは近代社会に発生し、展開された宗教運動なのである。

(大谷栄一『近代日本の日蓮主義運動』、法蔵館、二〇〇一、三九七頁)。

* 9 『師子王全集談叢篇』(以下『自伝』と略記) 一卷、師子王文庫、一九三六、一一頁。

* 10 『自伝』 一卷、三七頁。

* 11 両著の内容については、田中香浦稿「仏教僧侶肉妻論」の解題」(『日蓮主義研究』 一号、師子王文庫、一九六八)、同稿「田中智学居士の在家仏教―『仏教夫婦論』の解題をかねて、その意義を問う―」(『日蓮主義研究』 一七号、師子王文庫、一九九四) 等で詳しく解説されている。拙論「田中智学の在家仏教論について」(『日蓮教学研究所紀要』 四三号、立正大学日蓮教学研究所、二〇一五) も併せてご覧いただきたい。

* 12 『仏教夫婦論』(『師子王全集論叢篇』(統)) 師子王文庫、一九三七、二八頁)。

* 13 『仏教僧侶肉妻論』(『日蓮主義研究』 一号、四九頁)。なお、本稿では送り仮名を片仮名から平仮名に直した。

* 14 同右。

* 15 『宗門之維新』(『師子王全集論叢篇』 師子王文庫、一九三一、四七頁)。

* 16 戦後の智学に関する主な研究として、戸頃重基氏の研究が挙げられる。戸頃氏は『近代日本の宗教とナショナルリズム』(一九六六、富山房)、『近代社会と日蓮主義』(一九七二年、評論社) 等において、智学を「神道びいきの国粋主義者」と酷評し、智学の日蓮聖人理解を「国主法徒説」であるとした。智学を終始批判的に論ずる戸頃氏の論調は、その後しばらく、智学及び日蓮主義研究の基本路線として受け継がれていった。

* 17 『自伝』 一卷、三三六頁。

* 18 『宗門之維新』(『師子王全集論叢篇』 二八頁)。

* 19 『宗門の維新』(『師子王全集論叢篇』 二〇頁)。

* 20 『日蓮主義概論』(『日蓮主義新講座』 一号、師子王文庫、一九三四、三一頁)。

* 21 望月詩史氏が「石橋湛山の日蓮論」において、「愛国心」に着目し湛山と日蓮主義者達の共通点について論じている以外は、両者の共通性について論じた研究は管見の限り見られなかった。

*22 例として、次の評論をあげておく。

尤も今日の我表面的輿論を指導せる人々の中には、記者は却って其心情に於て憂国慨世の士の少なからず存することを知っている。或意味に於て、彼等は六百五十年前の日蓮の意気を多分に持てる人達であろう。彼等の力の甚だ強き一原因はここに在る。が不幸にして彼等は、彼等の比較的狭き見識の上に構成した信仰に陶醉せる余り、其信仰を、も一度広く社会の批評の坩堝に投じて、以てそれを醇化するの用意を忘れてゐる。而して彼等は、彼等と異なる信仰を抱ける者を異端外道、非愛国者と独断するのである。六百五十年前の、あの狂信の日蓮でさえ、「智者に我義破られずば」との条件を付した。今日の我一部の自任愛国者には、之だけの寛容さえも欠けている。彼等は、彼等の信条を国民に強制することを以て、国を愛する道だと誤っている。記者は彼等の心情には同情を表するも、其偏狭なる態度は、国を危くする最も大なるものとして排撃せざるを得ない。（昭和六年「真に国を愛す道 言論の自由を作興せよ」〔全集〕八卷、四〇頁）。

*23 大正一〇年「日蓮生誕七〇〇年」〔全集〕四卷、四四五頁。

*24 昭和四年「時評」〔全集〕七卷、五二八頁。

*25 昭和二七年「開宗七百年祭に際して」〔全集〕一三卷、五〇八頁。

*26 昭和二八年「宗祖に帰れ」〔全集〕一四卷、五二〇頁。

*27 昭和二七年「意志の堅い日蓮上人」〔全集〕一三卷、五〇七頁。

*28 昭和三二年「新入学生に告ぐ」〔全集〕一四卷、五三四頁。

*29 「湛山回想」〔全集〕一五卷、九二頁。

*30 「再録・インタビュー」父・日布上人を語る」〔自由思想〕第一三二号、一般財団法人 石橋湛山記念財団、二〇一三、五一頁）。

*31 「湛山回想」〔全集〕一五卷、一〇頁。

*32 「日本近代と日蓮主義（講座日蓮第四卷）」（春秋社、一九七二）二頁。